

シンポジウムの主旨

「宗教哲学の多様性 宗教の現実と哲学の立ち位置」

主旨

シンポジウムのテーマは「宗教哲学の多様性」であるが、宗教哲学を宗教学か哲学か神学か、いずれの一分野とみなすかによって、宗教哲学の性格もその多様性の理解も異なるだろう。あるいは宗教哲学をそれらの学の一分野ではなく、哲学の一つの仕方と考える立場もあり、それも多様性の一角をなすだろう。宗教哲学は、理性と科学技術が発展した近代以後の「あるべき宗教」や普遍的な宗教概念を探究してきた。日本では哲学および仏教とキリスト教の教義思想に基づく研究が多く、罪悪や救済論に関する洗練された宗教思想を提示してきた。同時に、無神論やニヒリズムにも関心を示し、科学と宗教の関係を考察してきた。科学技術の発展は工業化を促進し、都市化や地域共同体の崩壊など社会構造の変化ももたらしめているが、宗教哲学では近代化による社会変化にはあまり言及してこなかった。それは、宗教哲学が教団制度や現世利益などの宗教の現実態を批判ないし無視して、それらの意義や宗教性を積極的に考察しなかったことと関連しているだろう。

宗教学の一分野としての宗教哲学は神学・教義・思想の考察に限定されず、あらゆる宗教現象や形態の考察を通して「宗教とは何か」「人間にとって宗教とは何か」を哲学的に問う。この宗教哲学の多様性は宗教の多様性と複雑さを反映して、儀礼や戒律、宗教と社会や政治の関係などを考察する。それらの考察を踏まえて、宗教の真理や知、救済や罪悪観を再検討する可能性も広がるだろう。この場合の第一の課題は、教義思想として表現されていない宗教現象や形態を哲学的に問うこと、第二に、あるべき宗教ではなく、現実の宗教形態を考察し、その宗教性を解明することである。両者は神学をもたない神道などの考察を射程におくものだが、教義思想という第一次資料のない対象をどう扱うか方法論を含めて工夫する必要がある。実際には、宗教構造や宗教の機能など宗教学の成果を用いることになるだろう。

この二つの課題は「宗教を批判し、あるべき普遍的宗教概念を求める」という宗教哲学の理解から逸脱するように見える。だが、宗教は哲学によって構成されるのではなく、歴史的世界に存在する。最近のスピリチュアルへの関心などは古典的な宗教概念とは異なる様相を示すが、歴史的宗教は必ず民族や教会・教団などの宗教共同体を基盤に存続してきた。それを支え、その中で生きてきた多数の人々は教義や思想と無縁に、日本のように神道と仏教、来世の救済と現世利益を矛盾とも思わず生きてきた。「あるべき宗教」を問うにも、こうした現実の宗教性を深く考察することが必要なのではないだろうか。

発表要旨（暫定）

・小田淑子：「宗教学的宗教哲学の試み——イスラームの宗教性——」

宗教学は具体的宗教を研究対象とし、あらゆる宗教現象、形態、制度の宗教学的意味を求め、シャリーアを重視するイスラームの宗教性の解明を例に、現実形態から宗教性を考察する宗教学と宗教哲学の関係を模索する。

・手島勲矢：「ユダヤの宗教哲学について：個 有名詞と普通名詞の関係から」

中世ユダヤ哲学（アブラハム・イブン・エズラ）の名詞に対する問題意識を基礎にしながら、エルサレム・ヘブライ大学におけるユダヤ哲学と哲学（フィロソフィア）の衝突、〈個〉有名詞と一般名詞の論理的緊張、集合概念に対する一神教的反応などに触れつつ、宗教哲学を楕円的な関係として捉える（アブラハム・ヘシエルの議論）メリットを紹介する予定である。

・森哲郎：「京都学派の「宗教＝哲学」——禅の「十牛図」から見た種々の「場所」論——」

「宗教」を「哲学の終結」とみる京都学派の「宗教＝哲学」の〈表現性〉を、禅の「十牛図」の見直しを下敷きにして考えてみたい。即ち、西田幾多郎の「無の場所」、西谷啓治の「空の立場」、上田閑照の「虚空ノ世界」を、十牛図の第八・九・十図の連関に重ねてみながら、三者に一貫する「宗教＝哲学」の表現性と多様性とを瞥見することで、シンポジウムのテーマ「宗教の現実と哲学の立ち位置」を究明する機会としたい。